

大学最寄りの改札を出る

名状しがたい色の野菜たちが列を成し

じりじりと前進している

踏切越しの対岸

コンビニと畑と田んぼ沿いに

彼らはそこからひとりでに抜け出し

ひとつまたひとつ校舎へと続く列に交じっていく

それを横目に、一人分ばかり空いた左側を

はや歩きでかけ抜けた。

社会で生きていると

前に倣えを求められる

なんとなく同じにくくられる苦痛

けど自意識の欠けたこの群れたちには

快感にでも映っているのかも知れない

でも偶に少し列から飛び出ているやつもいるから

肩を振って躲す

彼らは脆いから、すぐに欠けてしまうのだ

私がどれだけ早く歩こうとも

彼らはペースを崩すことなく

信号が点滅しても、クラクションに急かされても

けして小走りにはならず

いまかいまかと自分の番を待っている

先頭にたどり着いたところで振り返れば

校門に置かれた大きめの鍋に雑に放り込まれ